

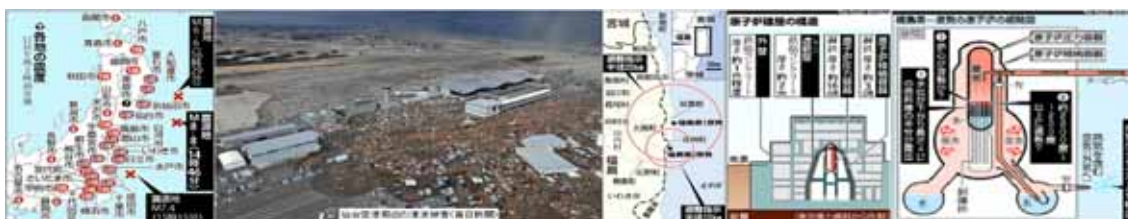
地震に遭ったのは、横須賀線の電車の中、電車が急停車した後2度大きな揺れに見舞われた。電車は大きく揺らぎ、電車が倒れるとの悲鳴に近い声が飛び交う。車内は危険と線路に降ろされ、徒歩で最寄の駅へ。更に道路を4時間歩き、力尽きてバスを乗り継ぐ。結局、バスからも降ろされ帰宅難民施設で一夜を明かす。地震警報がテレビに流れる度に、24階建てのビルが大きく揺れる。12階の施設で身を横たえる吾も揺れを感じて眼を覚ます。自宅はまだまだ遠い。翌早朝、比較的スムーズに自宅へ帰り付く。心配していた食器棚のコップ類の倒壊はなく一安心。しかし、思いもかけぬパソコンのマニュアル類の入った重い紙箱が書棚の上から落下しており、地震の大きさを見せ付けられた思いがした。

今回の大津波を引き連れて起きた大地震、エネルギーは当初マグニチュード8.8と発表されていたが、9.0に訂正された。今回の規模は、関東大震災の約45倍、阪神大震災の約1450倍に当たり、チリ地震がマグニチュード9.5、アラスカ地震マグニチュード9.2、スマトラ沖地震マグニチュード9.1に次ぐ世界で4番目の規模を持つ。

地震の震源地に近い福島原発の1号機は大きな損傷を蒙った。保安院によれば、建屋は壊れたが、周辺の放射線量などから、原子炉の格納容器は無事、ただちに大量の放射性物質が外部に漏れるようなことはないという。

寺田寅彦によれば「地震というものの概念は人々によってずいぶん著しくちがっている。理学者以外の世人にとっては、地震現象の心像はすべて自己の感覚を中心として見た展望図(パースペクティブ)に過ぎない。震動の筋肉感や、耳に聞こゆる破壊的の音響や、眼に見える物体の動揺転落する光景などが最も直接的なもので、これには不可抗的な自然の威力に対する本能的な畏怖が結合されている。これに附帯しては、地震の破壊作用の結果として生ずる災害の直接あるいは間接な見聞によって得らるる雑多な非系統的な知識と、それに関する各自の利害の念慮や、社会的あるいは道徳的批判の構成等である。」としている。

まさに、今回もテレビや新聞には「与野党党首会談の席で、福島第1原子力発電所1号機の被災状況に関し『大丈夫』と野党側に説明していたことが分った。1号機は会談の最中に爆発したが、首相からの報告はなかった。」と批判したり、爆発後の風景写真を何回も放映するだけでなく、「燃料のウランが核分裂してできる放射性物質のセシウムが原子炉外で検出されたことなどから、炉内の温度が過度に上がって核燃料が溶け出す『炉心溶融(メルトダウン)』が起きたおそれが出た。」と何度も憶測を述べ、必要以上に視聴者の不安を駆り立てている解説者がいる。今は無暗に批判する解説者は不要である。



<参照> 寺田寅彦「地震雑感」